
パラレルワールドで超能力 remake

ブラックフィクション

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレルワールドで超能力 r e m a k e

【Nコード】

N5246J

【作者名】

ブラックフィクション

【あらすじ】

元々は普通の世界に生きていた、小暮栄太はこぐれえいた何故か別の世界に移動してしまう、しかしあっちの世界とこっちの世界の両方にいた小暮栄太と言う人間が入れ替わっただけなので、ある程度の人間関係などは変わっていなかった、それでも違ったのは 超能力とガトーそしてナイターと言う3つのキーワードであった。

動き出す者たち／ugokidasumonotati（前書き）

こんにちは、ブラックフィクションです。

今回の作品は、同時連載している

パラレルワールドで超能力

を詳しく書いたものです

よって残酷なシーンが出てしまう事がありますが

よろしく願います

動き出す者たち　u g o k i d a s u m o n o t a t i

二人が部屋の中で喋っている

しかしその部屋は二人でいるには広すぎる上に周りには椅子など家具と言えるものは何にもない、

一人は立ったまま一人は寝転がって話している

その一人は目を閉じたまま背中を壁に預けながらもう一人に喋りかける

「さて、ナイターの野郎どもはどうするつもりだ？」

と言って壁に寄りかかっている一人は、右足を左足に乗せる

「色々、色々、色々考えてあるけど！　やっぱりAとDの作戦を平で行ったほうがいいんじゃないかって思って、まずAの作戦から実行に移すことにしたから、Dはナイターが動き次第に実行することにしたから！」

と壁に寄りかかっている一人と反対側の壁の下で寝転んでいる一人がそう言う

「そうか、では誰かを迎えによこさねばならないな」

と言って足を組みかえる

「分か、分か、分かっているって、まあちょっと実力試すために鳴田を送ることにするつもりだから」

すると壁に寄りかかっている一人が目を開く

「鳴田は切れやすい、一応田中を監視につけて置き、鳴田のせいですべてが駄目になったら困るからな」

とだけ言って一人はまた目を閉じる

すると寝転がっている一人は、口端をわずかに引っ張り

「心配、心配、心配性？」

「ふん、心配性なんかではない」

はははっと寝転がっている一人が笑った後に一言言った

「じゃ、じゃ、じゃあとあえ、Aの作戦開始ってことにするわけ」

人核と呼ばれる人間はビルの屋上にいた、

フードを深くかぶっているため遠くからは顔は確認できない

しかし人核は何かを知っているかのような顔しているように思える

「人工的にやるつもりか、ガトーの連中は」

と独り言を言う人核は、全身真っ黒なコートで身を包んでいるが隙間から所々見える水色の服が着ているのが見えている

人核はため息をつきながらフードを浅くすると

「それはそれで面白い！」

うつすら見えている口元が笑っていた

耳元でケータイのアラームがなる
うるさいな

と思いながら俺は布団から起き上がる
てか、腹減ったなそういえば昨日夜に帰ってきたから
晩飯食ってないな、と思いつつ
机の上においてあるメガネケースからめがねを取りかける

「飯」

と言ってキッチンに向かう
しかしキッチンに入ってもいつもと違う感じがする
だがキッチンはいつもどおりきれいにまとまってある
テーブルの上にはちゃんと良く分かん人形はあるし
冷蔵庫もあるし鍋もフライパンもある

「気のせいかな？」

と言ってキッチンに向かい冷蔵庫から卵を2個出して
コンロに火をつけその上にフライパンをスライドさせそのフライパ

ンの上に卵を1個また1個と割っていく

その流れかかること5秒なれたものだ

目玉焼きを作って皿に移す

うまい具合に焼けており、俺の鼻にいい匂いが届く

「ふん、ふふん、ふん、ふふん」

と鼻歌を歌いながら目玉焼きを皿に移してから昨日のうちに炊いて
おいた炊飯器に近づきしゃもじとお椀を左手で二つを持ち右手で炊
飯器を開ける

中から熱気が飛び出てくる

顔を炊飯器から避けるようにしながら左手のしゃもじだけ右手に移
してうまそうなご飯をお椀に移していく

炊飯器を右手の甲で閉めて右手に目玉焼き左手にご飯を持ち

テーブル付属の椅子に座る、椅子は学校にあるような物を家用に工
夫されたものだ

テーブルの上にご飯と目玉焼きを置くと良く分からん人形の腕に置
いてある

箸^{はし}を取る

「いただきます …？」

と言って箸を目玉焼きに突っ込もうとしたところで手が止まる

俺は目をパチパチさせる

いつもテーブルから見えるはずの電話が見当たらないのだ
あれ？

と考えながら箸を皿の上に置いて椅子から立ち上がりもう一度いつ
も電話がある場所を確認する

しかし発見できない

俺は顔をキョトンとしながらいつも電話があるべき場所に近づく

だが何もない、配線もないし回りに人形が置いてあり配線なんかで
きない様になっていた

おかしいな？

と思って電話の近くを軽く物色する

しかし何もなく、いや最初からなかったようになっていた

俺は首をかしげるが次見たものに驚愕する

電話をつないであるはずのコンセント自体がないのだ

これでは電話なんか繋がられるはずがない

「ケータイは？」

と言って俺は、家の電話の代わりとして使用されるケータイ電話を
探し始める

まず、ポッケに手をつ突っ込みないか確認をして：

「ケータイは普通にあんのかよ！」

とポッケからキーホルダーの着いたケータイを取り出す
窓から差し込む光が赤いケータイに反射して眼に届く

「まっぶし！」

ケータイをテーブルに置く

てか、まず何で家の電話がなくなるんだ？

「泥棒？」

だが俺は自分の言ったことを、首を振って自分で否定する、
コンセント自体なくなっているんだ、泥棒でもそんなことできない
だろうし

うゝん、と深く悩もうとしたらテーブルに置いてあるケータイの画面に目が行ってしまい目を見開く

13..00 とケータイには表示されていた

「マジかよ、どんだけ寝てんだよ！」

あまりに大きな声を出してから、ちょっと落ち着くために胸に手をやる、すると耳に何やら外から水が地面に落ちる音が聞こえてくる雨？ やっぱ、洗濯物干しっぱだ

急いで俺は庭へ続く窓へ行き、乱暴に開けて外を見る

しかし洗濯物は干してなく目の前にただ広い道路が広がっているあれ？ 昨日取り込んだっけ？

.....？

目の前の道路に水の音の原因があった、

しかしそれは、マンホールから水が出たわけでもなく

近所の奴らが水をまいているわけでもない

俺、小暮栄太は、
こぐれえいた

今までの人生の中でびっくりしたことがあったと言えばテストで88点取った時ぐらいの小さいことぐらいだが髪は黒髪でいつも寝癖はついているし

目の色はもちろん黒

今中学3年しかし頭は良くない 社会以外

高校はそこら辺の馬鹿高校でよいと思っている

ついでにメガネかけている

顔は普通かな？

こんなノーマルの人生の俺にこんなびっくりする日が来るとは

「何だ、あれは？」

俺は目の前の光景が信じられなかった

少学3年くらいの子がスケボーで宙に浮き

スケボーの後ろから水を噴射して

そこらへんを行ったりきたりしている

スピードはそこまで速くはないが落ちたら折れるんじゃないか？

って誰でも思うほど高い位置に浮かんでいる、しかもスケボーの後ろから出ている水は地面についた水はすぐに消えてなくなる

そんな光景を啞然と見つめているとバランスを崩したのか、俺が頭から落ちそうになるが手でスケボーの端をつかむ、しかしスケボーは簡単に揺れて落ちそうになる

「バツカ！」

と言って俺は少年に向かって走り出すが

俺が少年の下にたどり着く必要はなかった

何故かというと落ちそうになった少年は自分からスケボーを飛び降りたからで

さらに地面にぶつかってところで少年の足元に水が発生し少年を包み込む

しかし水は地面に当たるとはじけて消えるその中で少年がなんともなかったよ的な顔でちよつとため息をついている

少年が手を振り上げると上に浮きばなしになっていたスケボーが落ちてくる

普通だったら少年が受け止められるはずはないのだが、しかしスケボーはさっき少年が落ちてきた時と同じ状態になって少年の手の中に落ちてきて水がはじけとび

スケボーが現れる、少年はそれを地面に降ろすとそれに乗り

スケボーの上でしゃがみこみスケボーの裏を触る

するとさっきと違いスケボーの裏から水が勢いよく噴射してスケボーが浮き上がる

そしてさっきと同じくらいの位置まで来ると、裏からの水の量がす

くなりなり代わりに後ろからさっきと同じように後ろから水が噴射され少年を乗せたスケボーはどっかへ行ってしまった

「夢かこれは？」

とりあえず近くにあった看板を思いっきり殴る

………痛かった、腕から聞いたことのない音がしたし看板はちよつと曲がってしまった

俺は痛みを払う為に手を振りながら言う

「何あいつ？ カッコイイー！」

迷い対話／mayoitotaiwa

今俺は隣の家に来ている

隣には同じ年の幼馴染と言うものがすんでいる為

この状況を奪回するためにはどうしたらいいか質問してきた
そして今俺の目の前でベッドに座っている彼女が一言発する

「で、何のよう？」

全く、こいつには可愛げが全くみられない

もっと優しく聞いたりすることはできないのだろうか

大体何で人が相談しに来ているのにゲームしてるんだよ

赤色の髪でツインテールになっている彼女は、身長は俺より低く今は学校指定のジャージを着ている

彼女の名前は日和立見^{にちわたちみ}

俺から見るとは性格が悪い女だ

とりあえず俺はさっき見たカッコイイ少年の事を問う

「さっき空飛ぶスケボーが俺の家の周り飛び回っていたんだけど」

そしたら立見がいきなり震えだしたと思ったら、手に持っていた携帯用ゲーム機を俺の足元に落とす

「アウチュ」

俺は携帯用ゲーム機が落ちてきて痛めてしまった右足の中指を掴んで悶える

そんな俺を見ても謝りもしないで

「ついに、馬鹿を超えて知的障害者になったの？」

と真剣な顔で言ってくるのだから何だか不思議な感じである
俺は見た事を言っただけなのだが

だが、知的障害者とはいただけないな、俺が馬鹿と言うことは認めるが知的障害者だって認めてしまっっては、将来にかかわって来るような気がする

けれども、さっきから幻覚のようなものは見ているのだが

実は、あのスケボー少年を見た後に急いで家に帰り、顔を洗って、ご飯を食べ、歯を磨いた後に、もう一度外に出たのだが今度はスケボーなんかではなく、自分で持っているはずの荷物が宙にうかんだまま少年の後ろを追いかけてくるといった奇妙な光景であった、これはやばいと思って、思いついたのがオカルト系なら何でもいけますと自分で言っている秀太に聞いたらいんじゃないか？

と思ったのだが、わざわざあんな遠い家まで行くのは流石に面倒なので、とりあえず立見の家に行ってみようとゆう考えにいたったそんなこんなで、立見の家に上がりこんだわけなんだが、何故か足に携帯用ゲーム機を落とされてその上まさかの知的障害者呼ばわりされるとは思ってもいなかったわけで、しかしそれを認めるわけにもいかないし、かといって幻覚のようなものを見た事は事実なのだし、しかもあれが幻覚にしては、はっきり見えていたような気がするのだが

何て考えていると、不意に立見が立ち上がり俺の頭を撫^なでる

「可愛い〜〜」

「何故そうなった〜〜!!」

いきなり分けの分からない行動に出た立見の手を掴んで叫ぶ

「いやなんか、悩んでいる姿は可愛いな〜と思って」

何て単純な思考回路なんだ、こいつには恥つてのはないのか？
いやどっちかと言うと撫でられている俺の方が恥ずかしいのか？
何て考えると俺の手から逃げてベッドに再び立見が座る

「とりあえず、コーヒーでも飲む？」

と、部屋にあるコーヒーを指さして言う
俺はその方を軽く見てから

「じゃあ、もらうわ」

と地面から立つ、軽く手を伸ばせば届くと言うぐらいの距離にまで
近づいて

俺はちよつと落胆する、

「これお前の飲みかけだよな？」

そう言って立見を見ると満面の笑みを浮かべて、さあゝ早く飲んじ
やってって目をしている

俺はそんなに目をキラキラさせても、俺飲まないからね

「ところで、空を飛ぶスケボー少年はどうなったんだ？」

と何気なく話題をずらしてみる

ああと言って笑みを消して簡単に述べられた

「風系 水系だね」

何だそれは、RPGか？ いやまゝ俺も好きだけど？

今は関係なくないか？

とりあえず、考えていたことをまとめて聞く

「何言ってるの？」

「マジで病院行く？」

即答だった、全くやっぱりこいつには可愛げがない

大体そんな真剣な顔で言われたら

マジで悲しいんだけど

すると立見がまあいいやと言って

「一昨日誕生日だったよね？ もうすぐあんたの超能力何か分かるじゃん！」

俺はついコーヒーを取ってしまう所だった

それほどまでに動揺してしまったからである、

だって俺の事は絶対に騙さない立見の口から、超能力って言葉が出たのだから

てことは何だ？ 超能力があるって？

そんな馬鹿な話があるわけがない、大体昨日まで皆普通だったんだから

とりあえず無理やりにも理解しようとしたものだから

俺の脳内ではパンクする

「どうしたの？」

おっといつの間にかボーとしていたみたいだ、

心配そうに俺の顔を覗き込んでくる

大丈夫？

と聞きたそうな顔を見ながら俺はパンクした脳を何とか修復し、次

にどうするべきか模索する、

真面目に言っている立見からはもう何も得ることはないだろうから、やはり別の奴に聞くべきとゆう考えになり真っ先に思いついたのが、やはり秀太であった、

思い立ったら即実行！

とゆうことで

「じゃ俺行くとこできたから」

と言って前の扉に向かって歩き出す、そして立見の前を通る時に左足を思いつきり掴まれる
軽く痛かった

「どうした？」

「もう行くの？」

またか？ こいつ俺が家から帰るとき毎回こうやって、引き止めるんだもん

「ちよつと行くとこできたから！」

とちよつと強めに言うのと、すぐに放してくれた
するとちよつとさびしそうな顔をしながら

「じゃゝまたね」

と言ってきたから、俺は手を軽く挙げて返事する
そして立見の家から出た俺が見たものは
スケボー少年と同じくらいの年の少年がケンカをしている
だが普通のケンカではない、

スケボー少年が水の壁を作って相手が放ってくる電撃を防いだり
スケボー少年が水を相手の周りの地面に円状にして相手を囲むよう
に水が発生しそれが水のカーテンのように相手を包み込む
そんなハイレベル？ なバトルを見て素直に感想を言う

「カッコイイなあいつら」

とりあえず、とっとと秀太の家に行かねくと、今の状態がどうなっ
てのか全く分かんねーや
まゝ秀太が分かるとは限らないが

腐った空気と日常 k u s a t t a k u k i t o n i t i z y o u

栄太の家より約15分間ずっと自転車に乗り続ける事でたどり着く事ができる、なんとも普通の家と変わらない家、この家の周りには家と呼べるものも少なくなっている、ある物と言ったら鉄パイプ、鉄くず、ボルト、ナットなどが錆びて転がっている

あいからわずこっち側は空気が悪い

そのためかあまりにも長居したら吐きそうになる、ちなみに今も

俺は片手で軽く口元押さえつつ、片手で自転車を動かす

何とも普通な家の近くに自転車を止めた後周りを確認する

今ではもう使われなくなった工場、廃工場が風景のほとんどを占めている

「良くこんなところに住めるなあ」

俺だったらたぶん2日も持たないだろう、何か不気味だしなんて考えながら、普通の家の呼び鈴を押す

「ピンポーン」

「……………」

あれ、いないのか？

でもあいつが出かける事なんてまずないだろうし、主に引きこもりのため。

かといって気づいてないわけでもないだろうし

まさか、まさか、殺人？

「……………」

うな、ベタな話があるわけないだろう
俺はちよつと苦笑しもう一回呼び鈴を押す

「ピンポーン」

「……………」

自分の汗があごから手に落ちる

やっぱい、何か冷や汗かいてきたんだけど、いやまてよ、珍しく出かけているってパターンもあるわけだよな、うん、やはりそんなベタな展開があるはずがない

と、俺が自己解決すると同時に秀太の自転車が目に入る

一瞬心臓がマジで止まりそうになった、だってあいつが自転車に乗らないでどっか行くことなんてあるはず無いから……………」

次だ、次でなかったら、窓から攻め込もう

「ピンポーン」

「……………」

「窓ガラスってどう割った方がいいんだろう？」

と、俺が真剣に考えこもうとすると

「はい、誰すか」

いきなり声が聞こえて、わずかに仰け反る

びっくりしたり、本当にびっくりした

てか、一回で出るよ、無駄な事色々考えてしまったじゃないかと考えつつも、言葉を返す

「栄太だよ」

「入るすよ」

ウィーと言って、俺は扉を開ける

玄関には入るが靴は脱がずにそのまま奥に歩いて行く

中に入るとすごく暗い、窓もないし壁などに穴も開いてないため玄関の扉を閉めると本当に暗い何も見えない、だが暗いおかげで奥の方でわずかに光っている部分が良く分かる

足元をおぼつかせながらそこに向かって壁伝いで歩いていく

何も見えないとは怖いものだ

「っ！」

タンスぽっいのが置いてあったらしく、俺の右足から何とも鈍い音が聞こえる

あまりの痛さにその場にうずくまる

何か今日右足に負担かかってばっかじゃない？

しばらく痛みと対決してから、俺は立ち上がりもう一度光に向かって歩いていく

俺はまた同じ事にならないように軽く下の方を重視して歩く

と言ってもほとんど見えないのだが

しばらく歩くと光に手を伸ばせばもう届くぐらいの位置に来ていたそこで安心してしまふのが俺の悪い癖だ

下を見るのをやめてしまった

結果を言うまでもない俺は光に向かうために前を向いて歩いてしまったため右足があたる

工具が沢山つめてある箱に右足を

「ああー！」

それだけでも激痛が走ったのに、右足で蹴ってしまった箱の壁が破れ中に入っていた工具が右足の上に落下する、もし一個ならまだ耐

えられたかもしれないだが分かるように箱に入っていた分全部が俺の右足に降りかかる

「いったあああ！」

今のこの痛さを言葉にしてみよう、雨で滑りやすい道を思いっきり走っていると前から人が来たため急に方向転換して、思いっきりこけた時に左手の小指だけですべての衝撃を受けきった時の痛みだ
それかシャーペンの芯が10本連続で刺さった感じかな

今日三回目の右足ダメージに耐えていると不意に電気がつく
すると今日指していた光の中もとい扉から

なかたしゅうた
仲田秀太が出てきてしゃがみこんでいる俺を見下ろして言う

「電気くらいつけるすよ」

スイッチの場所が分かればこんな苦勞する事なかったの！
と、言いたかったのだがあまりの痛さに答える事ができない
仕方なく俺は涙目のまま秀太を睨みつける

すると秀太は目を細めて扉に戻っていく

俺は声を絞り出す

「置いてくのかよ！」

俺がそういうとこっちを振り向きもせず軽く手を挙げ、振ってくる
何故かめっちゃ悲しかった

しばらくするとやっと痛みも引いてきたので、立ち上がろうとする
とまた、右足に激痛が走る、ほんのちよつと動きを止めると痛みが
引く

「……………」

もう一回動く、激痛がまた走る
折れてないだろうね？

何とか時間をかけて、秀太の研究室らしい所についた俺はとりあえず、部屋の端に置いてある、ベッドにダイブする

「勝手に飛び乗らないで欲しいんすよ」

そう言って机のパソコンと向かい合っていた秀太がこっちを向く、秀太は髪が黒色で真っ白の服を着ている、この白い服のせいで滅茶苦茶、博士らしく見えてしまう

腕には常に赤色のリングを右手に2個、左手に1個、さらに青色のリングを赤色にはさまれるように右手に1個、左手にも1個つけている

同級生でかなり頭が良い、全国4位って本当にやばいよな
俺は寝転がったまま部屋の中を確認する

部屋はかなり散らかっており、目立つのが拳銃

「……………」

たぶんレプリカだろう、たぶん

実際にはここは秀太の部屋ではないのだが

秀太いわくこっちの研究室らしいところの方が落ち着くらしい
ちなみにこいつの本当の部屋は二階にある

「珍しいすね栄太から来るなんて」

ちょっと俺が拳銃でビビッたのを、察して話題を作ってくれたのか
それとも拳銃から目線変えさせたかったのか、ちょっとあせった声

で俺に何故来たのかを問いかけてくる

「色々あってさ、しかもちょっとオカルト」

そういうと、今のあせっていた感じが消えて、目に光がともる
何だ、その新しいおもちゃをもらった少年のような目は？

「ほう、それは聞かないとだめですね」

「実は」

「うん、うん」

と、いつの間に席を立ったのか俺の目の前に秀太がいる

「なんと」

「おお」

秀太がすごく、顔を近づけてくる

ちよつとマジで近いんだけど

俺はちよつと静かに言う

「近所のガキが何故か超能力？　らしいもの使うようになってんだ
よ」

秀太の顔がわずかに曇る

「栄太、冗談言いにここまで来たんすか？」

何かすごく嫌な空気が出ていたのであわてて言い直す

「いや、だからおかしいんですよ、昨日までは超能力なんて非科学

的だって言っているテレビ見ていたぐらいなんだから」

すると秀太は、もっと顔を曇らせ言う、

「超能力は昔からあるすけど………!!」

しばらく秀太が黙り込むととりあえずと言って、秀太は俺の頭を叩く

「いった!? 何?」

しかし俺の質問に答えることなく、秀太は目を閉じる
しばらく沈黙の時間が流れ、秀太が何かを悟ったお坊さんのような
顔をしてゆっくりこっちを見て言う

「栄太、違う世界から来たみたいすね」

さすがオカルト大好きやろう、いきなりすばらしい発言だよ、違う
世界って何?

パラレルワールドみたいなもの?
ありえない、ありえない

「分かりやすく言うとパラレルワールドすね」

本気だったよ、もう俺が言う事なんて何にもないや、君はもう立派
な妄想族だよ、もしくは厨二病!
とりあえず質問

「何で分かったんだ、俺がパラレルワールドから来たって」

俺の率直な疑問だ

「あゝ、そうっすねそっちの世界じゃないみたいすね」
「何が」

秀太はまたパソコンの前に座る

「超能力すよ」

「あるわけないじゃん！」

そう答えると、秀太はちよつと黙る、するとパソコンのタツチの音だけ聞こえてくる

「まあゝ簡単に超能力説明してきますけど」

「はいはい」

と説明しようとする、あ、と言ってこっちを向く

「私の超能力は、脳4 だからできる事は相手の記憶を読んだり、考える事をできなくしたりする事が可能すよ」

そこまで聞いてやっと理解する、さっき頭を叩いたのも俺の記憶を読んで、何があったか調べたと言うことか！

そこまで理解すると、秀太の超能力についての説明が始まる

.....

2時間後

えゝと、とりあえず今説明されたことをまとめると
この世界では人が生まれたときからある

弔電子ちようでんしってのがあってそれが一人一人違って性質があるらしくそれによって使える能力が違うらしい、まゝあっちの世界でのDNAみたいのかな？

しかし、弔電子にも似ているのはいるらしくよって同じ能力でも力の差が出てしまうらしい

あと秀太、いわく

「たぶんこっちの栄太とそっちの栄太が入れ替わったんすね」

だそうだ、あっちの世界の俺大丈夫だろうか？

みっちり教えてくれた秀太先生は、ちょっと横になったまま、補足と言って俺に顔を向ける、

後何故か授業中ずっと、正座だった俺は、立てない

「栄太はまだ超能力何か分かってないんですよ」

「ふゝん」

何かそれ立見も言っていたような気がする

「確か明日、明後日ぐらいって言ってたすよ、栄太自身で」

「ふゝん、分かった、じゃあとりあえずしばらくは家でのんびりしとくよ」

ちょっと俺の超能力ってのも気になるしな

俺は何とかしびれていた足を立てて、外に向かう

じゃゝな、と言って扉から廊下に出ようとしたのだが秀太に引き止められる

「漫画でも借りるすか？」

「2、3個ほど」

「即答するか」

戻る事のできない道 modorukotonodekinaimiti

例の家具の無い部屋にて、二人の男が喋っている

一人は以前部屋にいた男と同じ顔である

その男は白い服の上に色々な色の絵の具をぶちまけたような模様の服で、下にも同じように絵の具ぶちまけているようなジーンパンを履いている

その男は、何も無い場所で何の意味も無く逆立ちをしている

「で、で、で、何のよう？」

もう一人は、逆立ちしている男を見下ろすように目を合わす

「にやんで？ 俺なの？」

と、その男が質問し返す

その男の服は基本白色で左袖だけチェックの虹色でズボンはキラキラ光っている

「単純、単純、単純な事だよ、作戦Dが開始されたときに絶対にナイターが潰しに来るから邪魔するのにもっとも適役なのは君だったっただけ」

と、男は言いつつ逆立ちの状態からもとの状態に戻ると、その場に座る

「自然は複数相手じゃないときついんだけど」
ログア

「OK、OK、OK分かっているってもし相手が単体だったら、流^{すが}石も手伝わせるから」

そうか、と言って虹色キラキラは後ろを向き扉に向かって行く
そしてドアノブを触って動きを止めると

「2年前みたいな事はもう無いよな」

その言葉によって軽く沈黙が降りる
するとさっきまでホノホノ顔だった男の顔が真剣な顔になる

「ああ、もう絶対にあんな事はない、いやさせない、光に誓ってな
！」

虹色キラキラはその言葉を聴いてから苦笑いにも笑みにも見える顔
をして出て行った

世界変わって1日後の朝

昨日秀太の家から帰ってきた俺はまず、脳の中にパンパンに詰め込
まれたデータの処理をおこなった
と言っても秀太が何言っているのかさっぱり分かんなかったんだけ
ど……………

まゝ簡単にまとめた結果

？超能力

？弔電子

？秀太が厨二病

ああ最後は違うわ！

とりあえず、超能力、弔電子の二つだけはこの世界の常識だって事だけは昨日把握した

その二つの言葉を頭の中で何回も繰り返しながら俺は玄関から出るちなみに今朝食は食べていない、なんか寝れなくて朝起きたときに腹が減ってないってたまにあるよな

ちよっと背中をつついてくる睡魔と闘いながら俺は外に出る

俺の家の玄関の隣に洗濯物を干す場所があるため、よって昨日窓から外に出て見た風景は今玄関から見える物とほとんど変わらない

やはり例の少年がスケボーの練習をしていた

昨日よりうまくなってるし

「後で、秀太の家にでも行くか」

と言いつつ、隣に位置するポストに手を伸ばす

中指と人差し指でポストの扉を開けると、中に真っ白でシンプルな封筒が入っていた

「珍しいな、俺に手紙なんて」

ちなみに親はロシアに妹は北海道に住んでいます

俺は東京が地震によって崩壊したため今新たな日本の首都になっている

しまぐちけん
島口県に住んでいる

俺は封筒をひっくり返して差出人を確認する

政府 からであつた

俺なんかしたつけ特にやばいようなことをやった記憶なんて無いんだけど

などと考えていると昨日秀太や立見が言っていた事を思い出す

「超能力か！」

ちよつとスキツリした脳と手紙を持って家の中に入る

メガネどこやったつけ？

まあいいやとりあえず手紙を読まないと

「さて、蛇が出るか蛇が出るか？」

あつ、それじゃ蛇しか出ないじゃん

とりあえず、と俺はちよつとふるえる手を抑えつつ封を破く

そしたら中には黄色と水色で装飾された手紙が入っておりそれを開いて読むと一番上に

「診断結果」

と書かれていた、健康診断？

それから意味の分からん文字などは無視して読んでいくと最後に俺が知りたいことが書いてあつた

「よってあなたの超能力は、ねじ曲げる 3 です」

「微妙〜！」

てか、ねじ曲げるってどんな感じにするんだよ

それにどうやって使うの？ 超能力なんて使った事ないからわかん

ねゝ

しかも3つてレア度？

俺はため息をついて

「やっぱり、秀太家に行くしかないよなゝ」

そのために俺は手紙を置いてそこらへんに捨ててある服をひったく
ると着替える

「洗濯は後でいいか」

俺は、ある程度家の中を片付けると手紙をポッケに突っ込んで外に
出る

約15分後

「ピンポーン」

「……………」

またこのパターンかよ！

流石にもう引っかからないって

「ピンポーン」

「……………」

ふん、その手には乗らんぞ、絶対乗らんぞ

「ピンポーン」

「……………」

「ピッキング、俺できないぞ」

「だれすか」

昨日より深く仰け反ってしまった

「栄太」

てか、一回で出ろよ

「二階す」

「了解」

俺は昨日とは違い家に入ったたら靴を脱いで近くに位置する階段に足を向ける

その階段を上っていくと奥に並ぶように扉が3つありその中でもっとも手前の扉を開けるそしたら秀太がパソコンの前に陣取り周りには工具が散らかっておりそれらを駆使して自作ゲーム機を作っていた

「何でそんなもん作れるんだよ」

俺は周りの工具を払いのけて座る場所を作る

「簡単すけど」

作る？ときかれたので、丁重に断る
俺に作れるわけないじゃん

「それより、政府から手紙がきたんだけど」
「もしかして、超能力分かったんすか？」

ああと言いながら俺は手紙をポッケから出す
軽く折れ曲がってしまっていた

「曲げるって書いてある」
「リアル系すね」

俺はオウム返ししかできなかった
秀太は自作ゲーム機を作るのをやめてこっちを向きながらペンチで
俺を指す
てか、ペンチって使うか、ゲーム作るのに？

「人間が実際にできる事を強くした能力の事す」
「なるほど、折るとか、投げるとか、泳ぐとかそんな事？」
「大体そんなとこす」

秀太がペンチをおろして後はと言って秀太が立ち上がる
そしてさっきまで触っていたパソコンに何かを打ち込むと

「これだけあるす」

そう言ってパソコンをこっちに見えるようにする

想像系 火 水 電気 など

遺伝系 動物などの力を使う
ノンリアル系 現実ではありえないこと
チェーン系 二つの系統を持っている能力
などが一般的と画面に書かれていた

「勉強になります！」

俺がそう言うところちょっと鼻が高くなった秀太が言ってくる

「こっちの常識だから覚えておくす」

ちよつと鼻折ってやろうかと本気で思ってしまった

「超能力ってどうすれば使えるようになるの？」

「普通はテンス波全身にあびせるすね」

「テンス波？」

説明するすか？ と言われたのでやはり丁重にお断りする

「で、それ浴びないと使えないの？」

「そうすね」

「どこで浴びれるわけテンス波は？」

「都心集合タワーですな」

「マジで」

都心集合タワーは、ここから約32キロである
無理、行く気にならん

「まあ、私なら違う方法でテンス波を体にしみこませることは可能
すけど」

「それで頼む！」

「即答すか」

そう言いつつ、秀太が俺の前から立ち上がると隣のダンスから変なカプセルを出す

しかもそれが異様にちっちゃい、あり蟻ぐらいの大きさだった

「これ飲むす」

「何これ？」

「この中にテنزズ波がはいってるす」

「入ってんの！？」

ふうんと言って俺がカプセルを受け取るとどこに用意していたのか水も渡してくる

「直接浴びれば、数秒ですむんすけど、カプセルだと半日掛かるすよ、まあ〜他にも後一個だけ方法があるんすけど、遠いすからね」

「都心集合タワーやこのカプセル以外にも方法があるの？」

「まあ〜あんまり関係ないすっから、とっととカプセル飲むすよ」

了解、と言ってカプセルを口に含み水で一気に流し込む、飲み込んだ後に秀太を見ると

「すばらしい力に期待をするすね」

と言って不適な笑みを俺に向けていた。

軽蔑された世界〜keibetusaretasekai (前書き)

島口県は、勝手に作りました、間違いじゃありませんよ
48都道府県です、今、はい、

軽蔑された世界〜kei betu sareta sekai

カプセル粗食から9時間後

何故か俺は寝ていたらしい、秀太に聞いたら

「寝ていたとゆうか……気絶していたとゆうすか……栄太は寝てたんすよ！　そう、寝てたんすよ」

ちょっとあやふやに言われたが大丈夫だろう、あれ？　秀太顔が青いぞ？

そんな事より、と秀太が両手を腰に当てて立ち上がる

「超能力について補足説明するすよ」

と、秀太が言って何故家にあるのか疑問に思うホワイトボードを持つてくる

大体ホワイトボードなんて買おうと思わんし、使い道なんてあるか？

「さて、まず手紙にも記されている　3　と言う数字について説明するすよ」

秀太はホワイトボード付属のブラックペンでボードに大きく　3　って書く

3　に面積使いすぎだろ、半分以上使ってんぞ

そして秀太はホワイトボードに　強さ　と小さく書きその下に　0、1、2、3、4、5と書く

ほれみろ、書くところないせいでめっちゃ小さいじゃね〜か

「それで、強さって事は、超能力のレベルって事か？」

「半分正解、半分外れすね、この数字は超能力でのレベルの強さではなく、同じ力を持った能力者の中でのレベルす」

「て事は、秀太で言うとな、秀太以外の脳ブレインの能力者の強さの中で大体4 ぐらいと」

「理解が早くて助かるす」

秀太はブラックペンを背後に投げる、かなりの金属音しているんだが大丈夫だろうか？

「後説明してない事と言ったら？ あ！ 後力を使うときは、使う感じをイメージするだけでいいすよ 条件がいるやつもあるすけど」
「イメージと言ってもなく、スプーン曲げるあんな感じでいいのか？」

「いいんじゃないすか」

と言った後に秀太がちよっと思案顔になる、俺がどうした〜と言って近くに落ちている工具を投げつけようとする、するといきなり秀太が立ち上がった

「じゃあちよっと外行くすか！」

と、言ってきたものだから、ビックリして、そうビックリしたから工具を秀太の弁慶の泣き所に投げつけてしまった

「っー！！」

しばらく、マジで泣いていた……秀太……

秀太マジ泣きから30分後

「悪かった!」

「本当すよ、あんな痛みこれからの人生一回あるかないか分かんないすよ!」

秀太の足は運よく折れたりヒビになったりは無かったが、すばらしく腫れてしまっている

すごいよな、スパナ投げつけたのに普通、折れるよな普通

俺は、土下座しながらちょっと感心していた

「とりあえず、矢野工場行くすよ!」

「何で?」

「栄太の超能力の実験すよ」

秀太はそう言ってめっちゃ腫れている右足を引きずるような形で外に向かっていく

そこで俺は実感したよ、秀太と俺の友情は本物だって事に、だってあんな怪我させたのにいまだに俺のために動いてくれていんだぜ、目に何か熱いものが

「早く来るすよ」

背中越しに声をかけられ俺はあわてて立ち上がる、しかし急にトイレに行きたくなり

「悪い秀太ちょっとトイレに行ってくる、先出といて」

「そうすか、そうすか早く言って来るす」

何故か未来を予言した予知者みたいな顔していたが、何かあるのだろうかあまり気にせず俺はトイレに向かった

「俺のチャリがない！」

トイレから帰ってきた俺が最初に発した言葉はまさか自分の自転車が盗難された事を肯定する言葉だった

「無くなってしまった物はしかたないじゃないすか！」

何故か秀太の顔がボウリングで300出した時に似たの顔に見える上に秀太の周りに何故か工具が散らかっていた

「つてあれ、チャリの部品じゃないか！」

「何、言ってるんすかゝさっさと行くすよ」

何か腑に落ちないけど、まあいいか今日は友情も確認できたしいいとするかゝ

ランニング中……………

しばらく静寂が訪れる、何か嫌だなこの空気でも喋る事ないし、いや聞こうと思えば超能力うんぬん聞けばいいのだけど、ちよつと疲れてるしまった今度にしよう
なんて考えていると

「後10分程度でテンズ波がきいてくるす」

いきなり秀太が発言、この静寂に耐え切れなかったらしいまゝ、俺も嫌だったけどなああの空気は

「そんなに経った？ 全く気づかんかった」

「結構経つすよ」

そう言われればちょっと空が暗くなってきたような……

矢野工場到着！

「ここで何やるの？」

「もう力はあるようになってるはず！ すから」

俺はその言葉を聞いて手を握り閉めたり足でそこらへんの壁を蹴ったりするが何か変わった感じは全くしない、むしろ蹴った足がジンジン痛むのだが……

「特に変わってないと思うけど」

じゃあと言って、秀太はそこらへんに落ちている鉄パイプを拾って手の感触を確かめている、何してんの？ と聞こうとした刹那

「今からこれで殴るすから、これが曲がる感じをイメージするす！」
「ええ！ 何いきなり？」

すると秀太は俺に有無言わず俺の腕にむかって鉄パイプを振り落とす

マジやばいって、イメージしなきゃイメージしなきゃ、ガキっぽい
それどころじゃなく、イメージだ、イメージ！

と思いつつ俺は鉄パイプを払いのけるようにして鉄パイプと接触する瞬間に目を閉じる……

「とまろ　こんなとこっすね」

秀太の声がしたため、ゆっくり目を開けるだが視界がわずかにぼやける、目を閉じている間には何の痛みも無かったって事は、途中でやめたのか？　でも完全に当たった感じはしたよな……

ようやくはつきりしてきた、視界の中に秀太の手の中で曲がるストローのように曲がっている鉄パイプがあった

「何がどうなった？」

今腕には確かにあたった感覚はしたのだがなんと言うかアルミ缶を握りつぶす時のあの感覚に近かった

「栄太が超能力使ったんすよ」

「嘘、マジで俺目つぶちまったよ」

秀太はじゃあと言って壁のような機械を指差す

「あれに、手を添えてみるす」

俺は言われた通りに壁に手を添える

「さっきと同じようにイメージす」

「了解！」

と言ってイメージする、今度は見逃さないようにパッチリ目を開けながら

すると手の添えている部分を除いて壁がメシメシと言う音を出しながら奥の方曲がり始めた

「やば！ スゲー！！」

「疲れた、筋肉痛みたいなんだけど……」

と俺は近くにあったドラム缶に腰を下ろす

「お疲れ様す」

練習のようなものが終わり周りはおもう真っ暗になっていた、どうやら今回の練習みたいなものは秀太が俺の能力の大体の使い方や限度さらに条件などを調べていたらしい

「そろそろ帰るすよ、データもまとめなきゃ駄目すから」

「また俺は走らない駄目じゃなかよ！」

「努力、根性、超能力すよ」

「どこの校訓だよ！」

と言いつつも俺は、ドラム缶から腰を上げると、ズボンについてい

るゴミや砂を払う

秀太が自転車を取りに言っている間星を眺めている
手に入れてしまった、超能力あっちの世界では普通は手に入らない
物それを俺は手に入れてしまった
何故かこの時俺は、地球と月は近いようで何故こんなに遠いのかと
考えていた

「とりあえず、今日分かった事説明するす」

「おう」

「まず栄太の力は触れた物のみに発動するみたいす」

「おう」

「触れているところが中心に曲がるす」

「おう」

「………おうしか言っていないすね」

「おう」

「…もういいすよ」

「おう」

「………」

秀太の家戻ってきました

「じゃあ、明日学校であうす」

「はあ……はあ……まだこっから家まで遠いんだけど…」

「知らんす」

ひどい、と思いつつも何にせよ走らなきゃならないので、走り出す

「じゃあなあ」

ちよつと言葉が変になっていたが気にしない

俺の家の前

「…はあ…はあ…あれ…誰かいん…じゃん」

と俺は走るスピードを落とすといつても元々走っているようなスピードではなかったので、赤ちゃんがハイハイするのと変わらないような速度で歩いていく、家の前にいたのは青髪の人がいた、年齢的には高校生ぐらいかな？

と考えていると、こっちに気づいたのか手のスケボーを離して、その上に乗ってさっていった、スケボーはやってんのか？

「てか、最初スケボーなんか持っていたか？ 気味が悪い奴だな何か化け者みたいな感じだな、あいつ」

そのとき俺は、疲れていたためあまり追求しなかった、何故俺の家の前にあの青髪が居たのかを

秀太は家に着いてから矢野工場から何個か持ち帰った鉄パイプを机の上に置く

「曲がるどころじゃないすね」

と言って鉄パイプが栄太によって曲げられた部分に触る

「曲がる以前にねじれているす」

秀太は考えるようなそぶりを見せたがすぐに頭を横に振る

「ねじ曲デイスタープげる って事すか、ちょっと興味があるすね… 0 じゃなくて 3 って事も気になるす」

秀太はため息をついてから布団に座りこむ、秀太が考えている事は一つだ

『秀太は世の中の主な能力は把握しているだが、知らない能力があるそれは 0 ただ一人の能力者しか発見されていない場合につけられる特別な数字つまり 0 この能力の事は秀太も知らない、だ
が言い換えれば秀太は 0 以外は全部の能力の事を知っているの
だ、だがねじ曲デイスタープげる なんて能力は聞いたことは無い、しかし栄太
は 3 と言ったのだ、それは最低でもあと一人は ねじ曲デイスタープげる
を持っている能力者が居るってことになる』

「もし私の考えが当たっているなら、栄太の能力とんでもない物の

ような気がするす」

今日の夜空はやけに暗かった

心は裏があるから表が輝くkokorohauragaarukarao

ちょっと早いけど更新です！

心は裏があるから表が輝くkokorohauragaarukaroomo

俺の髪をなびかす風と共にまれに俺を落とそうとする振動を受けて、俺の中にあるメンドクサイ心がキモチイイ心が変わっていく

どんな年になってもやっぱり自転車をこぐ事は面倒なもので、たとえどれだけ目的地が近くても体調が万全でも、『何故動かなきゃならん!』って事になるわけで、俺だけかもしれないけど……ましてや、昨日秀太の家から自分の家まで走って帰ってきた今日の俺には動くつもりは毛頭も無いわけであり、よって今日の学校は休もうかな〜と考えていたのだが、我が幼馴染はそれを許してくれなかったわけだ。

何が言いたいかというと、今自分は立見の自転車の荷台に乗っている!　と言う事だけだ

「最高〜!」

「何で栄太が乗ってんのよ、自分の乗りなさいよ!」

立見は振り返りもせず喋りかけてくる
そんな器用な事できないもんな立見……

「自転車誰かにパクられた!」

「だっつつつつさ!」

「うるさいうるさい」

「次はガキっばい!」

「うう……………」

俺がちよっとボケても圧倒的に叩き潰されます
立見の強さは本物だ!

「でも、自転車が取られたのは分かったけど………普通さ………こ
うゆうのって……栄太が前で私が後ろじゃないかなあって……」

「神聖なる戦いだ！ 文句はなしだぜ！」

「……………はあ……………ただのジャンケンじゃない」

腹立つ、と言いながらも立見はちゃんと自転車をこいでくれる、い
い奴だ

可愛げは全く無いけど

でも何で？ 腹立つといわれたのだろうか？ 意味が分からない
そんなこんな事を考えていると、いつの間に近づいたのか、学校が
見えてきていた

「着いたわよ、全く私みたいな可愛い子に乗せてきてもらうなんて、
普通じゃありえないんだから！」

「どこらへんが可愛いんだ？」

「死にたいみたいね！」

「滅相もございません！」

と言って、俺は立見から逃げるようにして荷台から飛び降りると立
見を困らせるためにわざと一言発する

「好きな人を後ろに乗せるのはどんな感じでしたかな」

立見は、なあと言って顔を赤らめると同時に俺に向かって鞆を投げ
てくる、それは前かごに入れておいた俺の鞆だった、よける暇も無
く俺はあえなく顔にダメージを受け俺は動けなくなった

顔狙うな、顔を……

実を言うところについては、中学2年の夏休みに感動するような告白を
されたのだが

まだ返事はしていない、何故答えないのか？　それはたぶん、立見の事は幼馴染としてみているからだと思う、たぶんね……

「帰りは栄太が前で私を乗せていきなさいよ！」

「さて、学校は何が違うのかな？」

「スルーするな」

おっと立見がご立腹だ、とつとと教室に行こうつと

それよか、皆超能力使いまくってんのかな？

とりあえず、楽しんでやろうじゃん！

「学校つまらん！　あっちの世界と全く変わってないじゃん学校だけさ」

俺は前半の授業を終えて、昼休憩になって上ってきた屋上でそう叫ぶ他には誰もいないから叫んでもOKなのだ！

「期待しすぎすよ、栄太はどうせ皆が皆超能力使ってると思ってたんすよね」

秀太がいたわ、俺はため息をついて頭を抱え込む

「学校内での能力使用は原則禁止すから、まずそんな楽しい事あるはず無いすよ」

俺は近くにある手すりを両手で掴んで足を伸ばす

どこの世界でも学校は勉強しかしいんだな
てか、超能力手に入れても何もすることないじゃん、意味無いよな
この超能力」

「あゝそれと、転校生来てたすよ、後輩すけどめっちゃ可愛かった
すよ」

「興味ない」

そうっすかと言って秀太は踵きびすを返して出入口の近くまで歩いてい
くとベンチのようなものに座る

大体転校生が来たからと言っても俺になんの意味も無い事だ、その
子が可愛いならモテないわけないし、俺なんかと好きな人を探りあ
うようなこともないだろうし、大体後輩だったら会う機会さえも無
いだろうからね！
なんて考えていると

「そろそろ、時間すよ」

そう言われて慌てて腕時計を確認する、1…30まで後3分だった
1…30までって短いよな、休憩10分しか無いじゃん

「やっぱ、早く行こうぜ！ 次なんだった？」

「体育す！」

「着替えてないじゃん！ もっと早く教えてくれよ！」

俺がそう言うと、秀太は学ランのボタンをはずす
こいつ……学ランの下に着てやがったよ体操服を！

「先行ってるす！」

「マジか！」

俺の言葉に答える前に、秀太は出入り口の前から消えていた……

帰りになって、教室からだんだん人がいなくなっていく風景を見ながら俺はため息をついた

「何で、ため息なんかついてるすか？」

「お前がもっと早く言ってくれば間に合ったのに……」

あの後俺は頑張ったのだ、1分で教室に行き1分で着替えて1分で運動場に行った、だが僅差で間に合^{きんさ}わなかったのだ

「そんな事よりとっとと帰るすよっと」

「いったいい」

学生鞆で殴られた、こいつは手加減を知らないのだろうか

「俺立見に乗せて行ってもらうから、先帰ってろ」

すると背中に思いもよらない襲撃を受け、俺は背中を反らしてしまう

「何ですか？」

俺は涙目で後ろを振り返る、そこには立見がすごいオーラを出して立っていた

「わたしが何であんたなんか乗せて行かなきゃならないわけ？ 1

回死んだらどうなの？　むしろ私がチョークであんたの両目潰してあげようか、そしたら死ぬよりひどい目に合えると思うけど！　それとも髪の毛1本ずつ引込ぬいてあげようか？」

「……………」

これだけで分かってくれた人はいるだろうか？　そう彼女は最近で言うツンデレの亜種ツンツンデレって奴なのだ
俺と2人きりのときは軽くデレているのだが、もし近くに知り合いが1人でもいようもんなら……

「きもい……きもい……きもい……きもい」

こんな奴なのだ、ツンツンしすぎだろ……はあ……

やはり風は気持ちがいい、俺の心を綺麗にしてくれるようだ
何とかして2人きりになったら、何とか乗せてもらえたよ、何とかね
それよりたまにいるよねージャンケンめっちゃ弱い人

「もっと早くできないのー？」

「これ以上無理だって栄太！」

今これデレ状態です！　分かるかな？　つか、これでデレって……
やっぱり可愛くねーな

我が家前

「ストップ！」

俺が一声言うだけで自転車がちゃんと止まる、俺は荷台から降りて立見の横に位置する

俺は立見の顔を見ると立見の目線は俺の玄関に向いていた、俺も自分の玄関のほうに目線を向けると

見た事あるような人が立っていた、そう昨日の青髪さんだ

「あれ誰」

と、うまいぐわいに声が重なる

「俺立見の知り合いかと思ったんだけど？」

「知らないわよ、って言うか完全に栄太の家の前じゃない」

「……………ちょっと声かけてくる！」

ちょっと危ないってって聞こえたが無視して青髪に近づき声をかける

「あの〜どちらさんですか？」

「……………」

「ここ俺の家なんですけど？」

「……………」

この人何にも答える気ないんじゃないの？ この人サングラスかけたらヤクザだよ、目つき怖いもん！

「小暮栄太か？」

「そうですけど、何か用ですか？」

「お前の能力は？」

「え……曲げるですけど」

え……超能力分かったの？ 何で教えてくれなかったの！ 栄太の
けちいいい！

と後ろで聞こえるが無視 つか、けちって、おい
そんな事より、青髪の目つきさらに怖くなってんだけど！

「ねじ曲げる（ディスターブ）の間違いだろ？」

えっ！？

何で知ってんの？ 秀太にもねじ曲げるも曲げるも同じだろうと思
って曲げるで通してるのに！

「一緒じゃないのか？」

「……………認めるんだな」

「え、うん、まゝ」

すると青髪は左手の平を地面に向けると俺の目の前でスケボーを作
り出す？

なんて言うかグニヤグニヤって出てきた、気持ち悪かったけど完成
したら中々カッコイイじゃん

「明日の午後矢野工場に来い」

「え？」

「来なかったらこの町いや県がなくなるぞ」

「は？」

「我らがトーによってな」

それだけ言うと、スケボーに乗ってささっと、どっか行ってしまった俺は今だに騒いでる立見の元に行くと前かごから自分の鞆を取る

「誰だったの？」

「知らん人」

どうやら途中から、立見には聞こえてなかったらしい明日学校で秀太に聞いてみるかな、なんって言ったけ……ガトーだ！思い出し脳内メモに書き込むと、家に入る前に立見に向かって言う

「明日もよろしく」

「何でまた、栄太なんか乗せなきゃならないのよ！」

「俺は信じてるから！」

と言ってさっさと家に入る、入る直前に何か立見が言っていたが知らないね！

俺は玄関に入っても靴は脱がずに、そのまま左手を口元にやる笑みがこぼれていた

「やっぱ、意味あるじゃん超能力！」

心は裏があるから表が輝くkokorohauragaarukarao

最近の僕の書き方はどうでしょうか？

ちよつと気になります！

次回楽しみに？

すいません

すいませんブランク入りました。

しばらく無理です。

すいません。

はい、すいません。

テスト終わったら再開します。

はいすいません！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5246j/>

パラレルワールドで超能力 remake

2010年10月17日03時07分発行